



精神科即興音楽療法における表現媒体としての打楽器の臨床的役割

石原, 興子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2025-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8239号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008239>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要約

氏名 石原興子
専攻 人間発達専攻
指導教員氏名 岡崎香奈准教授

論文題目

精神科即興音楽療法における表現媒体としての打楽器の臨床的役割

論文要約

精神科領域における音楽療法には様々なアプローチがある。そのアプローチの一つである即興音楽療法では、打楽器が多く使用されている。打楽器は、単にリズム楽器として捉えられがちだが、音楽生成の役割だけではなく、より深い臨床的な意味や役割を持つと考えられる。

本研究では、精神科音楽療法において臨床過程を考察し、精神病圏の患者の即興音楽を分析することによって、臨床における打楽器活用を通して起こった現象を精査し、打楽器が表現媒体としてどのような臨床的役割をもつのかを検証することを目的とする。

研究方法としては、筆者が行った音楽療法の臨床事例研究を基軸にしなが、文献研究、および音楽療法士へのインタビュー分析を行った。

第1章「打楽器の存在意義と役割」では、打楽器の持つ歴史的・文化的背景、「打楽」として成立する瞬間とその意味について、打楽器と人との関連性とあわせて論じた。打楽器は、楽器であると同時に、人にとって心理的、象徴的な意味も持っている。また打楽器は人の身体表現の延長上に生み出されてから、人の文化や社会の中で、人と人とを繋ぎ、情報や感情を伝える術として、また精霊や神仏と結びつく人の精神的な側面に働きかけるものとして、その役割を果たしてきた。

第2章「精神病圏患者の表現病理と音楽療法」では、対象となる精神病圏の患者の表現病理についての音楽的特徴を整理し、表現病理を引き出す媒体として音楽にどのような可能性があるかを論じた。精神科音楽療法において、とりわけ統合失調症患者による楽器表現には「感覚的演奏 (Sensorial Playing)」とも言われる「パターンの反復」や「散逸的な音の産出」などの特徴があると報告されている。また時間性の障害との関連も指摘されている。一方、そのような患者の表現はイメージの自由度が高いという点もある。これらの特徴は、絵画など他の表現媒体を用いた時の特徴との共通性がある。以上を踏まえ、精神病圏の患者により表現される音楽的特性を、統合失調症者の時空間の特質とともに考察した。即興音楽は、空間や時間性とも関連し「今」の時間を体感する接点となりうること、病者の表現は「強度」という「新たな生成的時間」のうちに捉えなおすこともできること、特に非言語的な表現媒体として楽器表現は言葉以前の身体的感覚性へシフトさせる原初的な体感を可能にする役割も含んでいることを論じた。そのことをふまえ、精神科音楽療法で実践されるアプローチ方法、形態、目的を概観し

た。

第3章「即興音楽療法における打楽器」では、まず即興音楽について概観した上で、即興音楽療法で使用される打楽器についてその臨床的役割を考察した。即興音楽療法における音楽や音は、クライアントのどんなレベルの音でもセラピストによって受容され、「今ここで」応えることができる。即興音楽療法において打楽器は、クライアントの対人関係の相互作用を観る点で臨床評価の活用にも可能性があり、臨床において対人関係をつくる上でも有効であることが示された。さらに、即興音楽には「生」の瞬間を体験できる時空間を生みだし創造的な新しい経験がクライアントに開かれているという臨床的役割があることを論じた。また楽器には、クライアントを「包容」する機能や対象関係理論でいう「移行対象(Transitional Object)」としての心理的意味もある。上記の文献研究に加えて、第4章の予備的データという位置づけで、臨床実践を行う音楽療法士にインタビューを実施し、打楽器の素材が临床上にもたらす影響について検証した。ここでは、素材の異なる、コンガ、ラトル、ビブラスラップ、木琴、鉄琴の5種類の楽器について、実際に筆者と即興演奏を行った後、インタビューを行った。その分析結果から、各楽器活動に①他の楽器との組み合わせ、②身体的影響、③音の特徴、④楽器に対する印象、⑤心理的影響、の5種類の異なる要素が含まれていること、各楽器には異なる素材としての役割があることがわかった。特に楽器の「響き」に、気持ちの共鳴との関連があった。そこでインタビュー結果から、打楽器特有の音色、ピッチ、強弱、リズムなどの要素が絡み合って作用する点、そして非言語的な表現媒体としての役割について論じた。

第4章「精神科デイケアにおける事例」では、筆者が携わった精神科デイケアにおける臨床事例を徹視的に分析した。精神科デイケアにおける集団即興音楽療法では、クライアントがどのように打楽器を表現媒体として使用しているのか、音楽療法士がどのように介入したのか、臨床の経過における現象を精査した。具体的には、8名の精神病圏患者を対象に19回、そのうち4回、墨絵という素材を併用した即興音楽療法セッションを実施した。そして、墨絵を図形楽譜として用いた打楽器即興場面と、打楽器のみの即興場面において、①表現された墨絵、②使用された楽器、③どのように楽器と接点があったのか、④音楽表現、⑤クライアントの語り、⑥セラピストの主観、について録画からそれぞれ分析し、まとめた。その結果、1つめの個人事例では、打楽器即興による表現において、①病理的な様相を残す反復表現、②内的動きを伴う反復表現、③安定感をつくる反復表現、が経過と共に変化することが観られた。2つめの事例では、打楽器素材の選択への意識と内的世界の表現との関係について、打楽器は侵襲し過ぎずに介入できること、さらにクライアントの内的イメージを膨らませる可能性があることがわかった。3つめの事例では、①言語化表現に繋がること、②自己イメージとの mismatching が起こること、③打楽と身体的関連があること、についてわかった。また場面別に、1. 墨絵を書く前の即興場面、2. 墨絵を描いた後の即興場面、3. セラピストとのペアによる即興場面、4. 全員による自由即興場面、において、セラピストとの関わりと集団の変化について検証した。さらに、打楽器即興と墨絵の組み合わせによる臨床的素材の役割として、1) 安全な環境設定、2) 徹視的な世界への表現誘発、3) 流動性を体感する場の提供、4) 時空間的広がり、について他の媒体との組み合わせによる可能性も提示し、素材の観点から論じた。

第5章「総合考察」では、第1章から第4章までをふまえて、打楽器が表現媒体としてどのような臨床的役割があるのかを総合的に考察した。第1節では、打楽器の臨床的役割として、1. 打楽器の表現はシンプルさ故に表現の多様性を獲得し、音の可塑性を追求する思考、気づきや集

中を生み出すこと、2. 多角的な表現を広げる自由度が高く1) 打楽器の形状、2) 打楽器の操作性、3) 打楽器の音質、などから特有性をもつこと、3. 打楽器にはマクロ的・ミクロ的視点の価値が存在し、それが即興音楽療法の臨床に創造的に活かされ得ること、4. 打楽器のミクロ的素材の臨床的役割、の四点を検討した。また第2節では、特に精神病圏の患者を対象とした即興音楽療法において、打楽器を、1. 自己と対象関係をつくる媒体として、1) 自己と対象物との関連、2) 自己とセラピストの関連、3) 自己と他者との関連、2. 「包容」機能として、3. 心身の解放と感覚統制へ導くもの、4. 『生氣的音楽の次元(Vital-Musical Dimension)』（筆者造語）に流動性をもたらすもの、5. 素材からみる素朴さ(Simplicity)、の五点について臨床的役割があることを考察した。

以上のように、本論文では精神科即興音楽療法における打楽器の臨床的役割を論じた。素朴さ(Simplicity)という特性ゆえに、打楽器には「拡大イメージ」と「微視的な世界」の両側面を広げることができる役割がある。打楽器による即興音楽療法は、精神病圏の患者に流動性を伴う「今」という生氣的な時空間を広げる一つの可能性をもつであろう。